

で言うキリスト教とは、これまでの「教會的」教理的」キリスト教ではないとする。

このように、ベックの仏教観は人智学の世界観の影響を強く受けたものであった。にもかかわらず、『仏教』は当時のドイツでは非常にポピュラーな仏教書となり、日本にも「ヨーロッパにおける仏教研究の最も代表的な名著」(岩波文庫版『仏教(上)』表紙)として紹介された。これは何を意味するのか。

世紀転換期のドイツでは、英仏に遅れ、かつ急激な近代化への抵抗感と社会的疲弊から「流浪する宗教性」とも言える様々な社会運動、宗教運動が発生した。そして、第一次大戦敗戦と帝国崩壊、その後のワイマール共和国の迷走は非合理的なるものを求める思潮の蔓延に拍車をかけた。一方、ドイツの仏教研究は、「合理的」な言語研究に基づく文献学的手法が主流であった。つまり、ベックは二重の意味で「ドイツ的」な位置に立たされていたのである。そして、ベックは仏教の神秘性に着目したが、少なくともベック自身は文献学者として振る舞い、自分が非合理主義に跪いたとは思わなかった。非合理的なものを求める当時のドイツ社会からの、そして大戦を経験したベック自身の内心からの要請に対して、ベックは「合理的」な理解の領域を、シュタイナーの言う「超感覚的領域」にまで拡大して説明を試みることで、科学的・学問的という手法を変えずに、こうした問題に応えようとしたのである。

その意味で、ベックの仏教理解は近代、とくに世紀転換期から一九二〇年代にかけてのドイツの宗教思潮上の仏教理解の特徴ある一事例と言える。

吉田兼好の死生観

新保 哲

中世鎌倉末期の隠遁者、歌人、随筆家というさまざまな顔を持つ人間通の魅力ある人物、吉田兼好法師の死生観について、彼の心の根底には如何なる問題の自覚・意識があったのか。そのことに関して考察し、明らかにしてみたい。

兼好には、仏道の修養を通じて、心の安心立命、常住平生の念を求める指向性の態度が窺われ、それは必ずしも宗派的色合いはみられない。たとえば、生死一番という一大事については、何よりもまず急ぎ心に掛けなければならない。願いごとを成就してから、暇を見いだして仏道修行をしようと思つたら、願いごとは果てるはずがない。そこであらゆる願いごとはみな妄想だと思い、直ちに一切を放擲して、仏道修行に専念する時、何の邪魔もなく、何の所作もいらず、心身ともに長く落ち着きを与えるというのである(『徒然草』第二百四十一段)。

兼好の仏道観の根底には、次のような死を間近に迎えようとする切迫した切実な精神的姿勢が窺い知られる。すなわちそれは第百三十七段にみえる。

兵の軍に出づるは、死に近きことを知りて、家をも忘れ、身をも忘れる。世を背ける草の庵には、閑に水石をもてあそびて、是を余所に聞くと思へるは、いとかなし。しづかなる山の奥、無常のかたき競ひ来らざらんや。其死にの

第9部会

ぞめる事、軍の陣に進めるに同じ。
そして兼好の己を知るといふ自覚は、

かたち醜けれども知らず、心の愚なるをも知らず、芸の拙きをも知らず、身の数ならぬをも知らず、年の老いぬるをも知らず、行なふ道の至らざるをも知らず、身の上の非を知らねば、まして外の譏を知らず（第百三十四段）。

という自己に対する非を認める積極的主体性への不在を、批判精神によって徹底的にあげだしている。とはいえ、この段の末尾で「貪る事の止まざるは、命を終ふる大事、今ここに来れりと、確かに知らざればや」（第百三十四段。貪欲の心がやまないのは、命を終える大事である死が、目前に迫っていることを、はつきりと知らないからなのだ）、と兼好は警告を発する。そこでは人間は一人の例外なく皆死への存在として、常にその生が死と背中合わせになっていて、いつ何時突然に死が訪れて来るか知れない、とする死への自覚において、最も兼好の主張したかった意図が顕著に表れてくる。

そういう常にいつ到来するとも知れない死を予測して、一瞬一瞬を自己の全力投球で精一杯生きていくひたむきな姿勢態度は、やはり世俗・俗事に身を没せず、一步退いて生・老・病・死という四苦から眼をはずさないからである。同時に、客観的な人間存在の根本苦のありさまに無理にそれを引き延ばしたり、逃避して忘却したりせず、自然態として諦観、容認し、そこに調和していくところの仏道修行観であると捉えられる。だから兼好が同段で「拙きを知らば、なんぞやがて退かざる。老いぬと知らばなんぞ閑に身をやすくせざる」と記述する如く、

極めて消極的意見を語り、分に甘んじる中庸態度となって表現されてくる。

他方、念仏に関しては、法然の念仏往生に関する教えを、尊い言葉として第三十九段に掲げ、特別な関心と感嘆をもって簡潔に記述している。しかしここでの念仏往生の教えは、直接に死後の浄土往生の世界に力点を置いて説いていないところは、先と同様である。加えて死後に対する救済の悲願は薄く、浄土の叙述描写は一文も記されておらず、あくまで現時点を中心においた現世での念仏観を表現しているところに、兼好の死生観の特色がある。